【キリスト、復活せり】

［イースター・メッセージ］

（復活弁証論）

『コリント人への手紙第一』

15章12～20節

熊　谷　徹

2014年4月20日（第3主日）

茅ヶ崎同盟教会・イースター礼拝

【序】洗礼式と復活；

①人がキリストを信じてクリスチャンになると洗礼を受ける。あの洗礼・バプテスマにはどういう意味があるのだろうか。単なる入信儀式だろうか。そうではない。洗礼とは、キリストを救い主と信じ、古き罪ある自我に対して死んでキリストにある新しい命に生きることを表明し決意する信仰告白の聖礼典である。洗礼の仕方には、滴礼、潅水礼、浸礼の3種類があるが、洗礼の持つ本来の意義を最も雄弁かつ象徴的に物語っているのが、全身を水に浸す浸礼である。

キリストを信じクリスチャンになった人は、古き自分、罪ある自我に対して死ぬ。そのことを示すために死装束である白い洗礼着を着て水の中に入る。全身が水の中に沈んだ時、その人は古き自分に対して死ぬ。だが、それは洗礼のほんの始まりに過ぎない。クライマックスは水の中から出て来る時である。古い自我に対して死んだ自分が新しい命を頂いて復活する、そのことを、水の中から出て来るという行為で象徴するのである。水に濡れた白装束は、罪を洗い清められた新しいいのちの象徴であり、古い命に死んで新しい命、永遠の命へ復活したことの象徴なのである（cf ロマ 6:4）。

このように、洗礼はキリストの十字架の死と復活とに密接につながっている。もしもキリストが復活しなかったら、浸礼式は、水の中に沈むという時点で終わってしまう。そうであれば洗礼もむなしく、洗礼という信仰告白もまた空しい行為となる。そのことをパウロは、**『コリント人への手紙第一』15章17節**でこう語る；「**そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰は《むなしく》、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。**」

今日はイースター、キリストが復活したことを記念し祝う日である。イースターにちなみ、「キリストは復活したのか？」という人類史上最大の謎に迫ってみたい。

【1】キリスト、復活せり；

（1）紀元30年4月7日、金曜日、キリストは十字架に磔にされて死んだ。その頭には「茨の冠」が被せられた。茨が頭と額に突き刺さり血が流れた。その顔にローマの兵士らが唾をはきつけ、殴りつけた。鉛や動物の骨を仕込んだ鞭で打た

れた背中は無残に裂け血が飛び散った。キリストはその背中に十字架を背負い、ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）を歩んだ。ゴルゴタの丘に辿りついたキリストは、両手首に大きな釘を打ち込まれた。その時、主イエスはこう祈られた；「**父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。**」（Lk23：34）…。それから6時間。主イエスは、少数の女性たちが深い悲しみを抱いて見守る中、「**完了した**」（Jn19：30）と叫び、「**父よ、わが霊を御手に委ねます**」と祈って、「**息を引き取られた**」（Lk23：46）。

（2）主イエスの遺体を葬ったのは弟子たちではなく、隠れ弟子の国会議員アリマタヤ・ヨセフであった。彼は30キロもの香料と没薬を用意し、それらを混ぜてガム状にして主イエスの遺体に塗りつけた。それから遺体を亜麻布で巻き、自分の家の墓に収めた(Jn19:39-40)。日本の墓と違い、岩をくりぬいて作った横穴式の墓である。そこに主イエスの遺体を安置した後、入口を巨大な丸石を転がしてふさいだ。その墓にはローマの権威を表す「封印」が貼られた。そしてローマ警備兵が墓の守りについた…。それから三日目の日曜日の早朝、主イエスの墓はカラになっていた。

《eg》3世紀の教会歴史家・エウスビウスはこう言っている；「紀元135年、ローマ皇帝ハドリアヌスはキリスト教を迫害し、その記念として、イエスが葬られた墓に、ローマの女神ヴィーナスの像を立て、ヴィーナスの神殿とした」。それからおよそ1750年後、チャールズ・ゴードンがエルサレム郊外に一つの園があることに注目し、大がかりな発掘調査を行なった。そしてそこにローマ時代の墓を発見した。墓の入口の上にはヴィーナス神殿の目印とおぼしき2つの壁龕があった。墓は横穴式で6畳程の広さがあり、遺体を二つ置けるようになっていた。だが遺体はなかった。ゴードンはこの墓こそ主イエスの遺体を納めた墓に違いないと信じた。それが「園の墓」(GardenTomb)である。

《eg》1800年程前の古文書がある。キリスト教への反感に満ちた文書だが、そ

の中にこう書かれている;「かの大工の子、かの安息日の破壊者、かのサマリヤ人にして悪魔にとりつかれた男、これこそ、彼は死人の中からよみがえったと言われるように、その弟子たちが密かに盗み去った者、あるいは、園の番人が、来訪者の群れによって野菜畑が荒らされないようにと奪い去った者である」。

この古文書が物語っていることはこうである。第一に、主イエスの墓の前には園か野菜畑があったということ。第二は、弟子たちは「イエスはよみがえった」と宣べ伝えていたということ。第三は、ユダヤ当局は「イエスの弟子たちがイエスの死体を盗み出した」と言い広めたということ。第四に、最も決定的なことは、主イエスの墓はカラになっていたということ、そして主イエスの死体はどこからも発見されなかったということである。

(3)墓がカラになってから40日の間、主イエスは弟子達の前に姿を現わした。そして40日後、主イエスは弟子たちの目の前で、雲に包まれて天に昇って行き、姿を消した(使徒1章)。そして、その時を境に弟子たちは一変した。情けない臆病者たちが「主イエスはよみがえった！復活した！」と宣べ伝え始めた。それも生命の危険を覚悟して…。彼らは世界の歴史を根底から揺り動かした。彼らの働きを通して全世界にキリスト教が広まることとなったのである。

【2】復活否定論とそれへの反論;

(1)キリスト教は「キリストは復活した」という歴史上の出来事に根拠を置く宗教である。キリストが復活したということは、全能の神を信じる者にとっては当然信じることのできることだが、一般の人には到底信じがたいことであろう。しかし、復活の事実性は数々の証拠・証言から裏付けることができる。

歴史学者トマス・アーノルドはこう言う;「私は、人間の歴史の中で、神が我々に与えた大いなる奇跡、即ち復活、これにまさってあらゆる証拠証言によって裏付けられている歴史事件というものを、未だに知らない」。また、考古学者ウィリアム・ラムゼーはこう言う;「私は復活を信じているが、それは復活がなければ一連の事実が説明できないからである」。彼らが言うように、「復活はなかった」と仮

定して一連の出来事を説明しようとすると、ますます混乱に陥るだけである。

(2)キリストの復活を否定しようとする人達は様々な仮説を立てて否定論を展開して来た。その幾つかを紹介しよう。

①第一は「墓誤認説」。カーソップ・レイクが唱え始めたとされる説で、「三日目の早朝にマリヤたちが行った墓は、イエスの遺体を葬った墓ではなく、別の墓だった。しかもそれがたまたま未使用の墓だったのだ」とレイクは言う。

②第二は「イエスは死んだのではなく気絶していたのだ」という「イエス仮死説」。これはフェントゥリニが唱え出したと言われる。彼は、「イエスは死んだのではなく、気絶しただけだった。強靭な肉体と精神の持ち主だったイエスは、墓の中で意識を取り戻し、墓石を押しのけて墓から出て来た。それを弟子達は「イエスは復活したのだ」と思い込んだのだ」と言うのである。

③第三は「イエスの死体は弟子達が盗み出してどこかに隠したのだ」という「盗難説」。これは先ほど紹介した古文書が述べている説である。現代の多くのユダヤ人もそう信じているという。

④第四は「幻覚説」。弟子達は、死んだイエスの幻を見て、「イエスは復活した」と思い込んだのだとする説である。

⑤その他にも様々な仮説が提唱されて来た。「双子説」というのもある。イエスには双子の弟がいた。兄イエスが死んだ後、弟はユダヤを去って遠く日本の地に逃れ、青森の戸来という地で一生を終えた。戸来(ヘライ)とはヘブライ人つまりユダヤ人の意味で、戸来には「キリストの墓」があるという…。その他もろもろ、様々な仮説が現れては消えて行った。それらの仮説に共通していることがある。それは「復活など有り得ない」という強い信念・信仰である。

(3)これらの「復活否定信仰」を詳細に検討してゆくなら、どの説もぐらつき始めることに気づく筈である。なぜ弟子達は突然変わったのか。臆病者の弟子たちが生命を賭けて「イエスは復活した」と語り始めたのは何故なのか。弟子達が「イエスはよみがえった！」と言い出した時、ユダヤ当局がそれを封じ込めることが

できなかったのは何故なのか。ユダヤ当局は、「イエスの死体は弟子達が盗んだのだ」と言うことしかできなかったのか。弟子達を逮捕して拷問にかけ「イエスの死体を出せ」と言えば一件落着なのに何故それをしなかったのか。イエスの死体を群衆の前に曝け出して、「ほら、これがイエスの死体だ。イエスは復活などしていない」と言えば全て終わるのに、彼らはそうしなかった。それは何故か。「イエスの死体がどこにもなかった」からである。

(4)これらの否定論よりも合理的な判断は、「イエスは復活した！」とみなすことである。ジョージ・ラッドはこう言う;「この歴史的事実に対する唯一の合理的な説明は、神がイエスをよみがえらせた、ということである」。

私達もそう考える。私達は、神が全能であると信じるから単純に御子の復活を信じることができる。だがそれだけではなく、そう信じることが一番合理的であり、圧倒的な証拠がそれを立証しているから、だから、「主イエスは復活した」と信じるのである。使徒パウロは**20節**でこう断言する;「**しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました**」。こうパウロが断言したように、本当に主イエスは復活したのである。

《eg》法律家でジャーナリストでもある男が、復活を否定できると考えて、綿密に調べ始めた。彼の信念は、キリスト教から「復活」という古き神話を取り除かなければならない、というものだった。彼は法律家・ジャーナリストとしての手法・論理を駆使して凡ゆる歴史的証拠と状況証拠を検証した。その結果、彼は復活を信じざるを得なくなってしまった。彼は自分が探求したことを一冊の本にして世に出した。フランク・モリソンの名著『動いた墓石』がそれである。

【3】キリストの復活が私達にもたらすもの;

(1)キリストが復活したことは、今の私達とどのような関係があるのだろうか。

①第一に、キリストが復活したということは、主イエスこそ死を打ち破ったお方であり、全能の力ある神の御子であるということを確証する。

②第二に、キリストの復活は神の約束が真実であることを確証する。主イエスが十字架に死なれたのは人類の罪の身代わりとして罪への裁きを受けて下さったからであり、その十字架の打ち傷の故に私達の罪は赦されたのである。このことを信じる人はみな罪を赦され死と滅びから救われる。主イエスこそ私達の救い主である。そのことを確証させるのがキリストの復活なのである。

《eg》哲学者のジョン・ロックはこう言う;「我らの主の復活は、キリスト教にとって最も重要な事柄である。イエスが救い主であるか否か、それは復活と共に立ちもすれば倒れもする。一方を信じればその両方を信じるのであり、一方を否定するならば両方共信じることができないのである。(中略)キリストの復活、これこそ、彼が救い主であるということの、論理的かつ偉大なる証明なのである」。

この大哲学者と同じことをパウロは語る。**13節と14節**でパウロはこう言う;「**もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。**14 **そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです**」。さらに彼は、**17節～19節**でこう語る;「**そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。**18 **そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。**19 **もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。**」

パウロは、「**もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしい**」と言った。これは反語的表現であり、その真意は、「事実キリストがよみがえった。だからあなたがたの信仰は確固たるものであり、永遠不滅なのだ」ということである。もしキリストが死を打ち破って復活しなかったとしたら、私達は未だに「死」という巨大な怪物、「**最後の敵**」(1Cr15:26)であり「**恐怖の王**」(Jb18:11)である「死」の奴隷なのである。もしキリストが復活しなかったら、私達は死によって

滅ぼされるだけの虚しい存在に過ぎない。

パウロはもしキリストが死を打ち破ったのでないとしたら、キリストによる永遠の命を信じる者は「**すべての人の中で一番哀れな者だ**」と言う。だがこれも反語的表現であり、その真意は、「キリストは死を打ち破って復活した。そのことを信じる者は必ず死を打ち破って復活する。そして永遠の命に生きる。キリストの復活を信じる者こそが、すべての人の中で一番幸せな者なのだ」ということである。そしてパウロはこう断言する;「**しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました**」…**20節**である。「**キリスト、復活せり！**」である。

③第三に、主イエスの復活は、「永遠の命は存在する」ということの確証である。私達の人生が死と墓で終わるのではないということの確証である。主イエスが死を打ち破って復活したように、キリストにつながっている私達も、死を打ち破って復活し、永遠の命に生きるのである。

【結び】ある父親の証し;

《eg》最後に、私の友人とその父親の話をしたい。友人の父親は、大学生の時に洗礼を受けた。だが社会人となってから教会にも行かず聖書も読まなくなった。立身出世街道を走り続けた彼は、信用金庫の相談役や市議会の議長になった。得意の絶頂にいたある日、彼は脳溢血で倒れた。一命を取り留めた彼を死の恐怖が襲った。何十年もの間眠っていた信仰が目を覚ました。彼は一変した。息子は父親の変化に驚いた。その変化をもたらしたのがキリストであることを知った彼は教会に通い出した。そしてキリストを信じた。父親の死後、彼は父の思い出をこう語った;「天国で父はこんなふうに言っているのだろう。鼻が割れたり爪が飛んだりするごとにお前には随分と肝を潰された。子供の怪我や病気ほど心が締めつけられることはない。できれば痛みを代わってやりたい。片足でも片手でも分けてやってもいい。お前が自由に手が使えるなら、私は寝たきりの生活に耐え抜く。私の脳溢血の苦しみは素晴らしい結果をもたらした。もう富や地位や名声を求めることはやめ、神の国と神の義とを求めよう。子供たちにもこ

れを求めて欲しい。…天国でまた会おう」。

「天国でまた会おう！」という再会の希望、「たとい死んでも生きる！」という永遠の命の確信…。その希望と確信は「キリストの復活」に確かな根拠があるのである。愛する者と天国で再会できるという希望、永遠の命が与えられるという確信、それは確かな、決して失望に終わることのない輝ける希望であり、確信なのである。

今日はイースター・復活日である。キリストが復活したことを記念する喜びの日である。キリストによって死が打ち破られた勝利の日である。主イエスは死を打ち破って復活した。キリストが死を打ち破って復活したがゆえに、私達もまた、死を打ち破って永遠の命に生きることができるのである。

キリストはこう仰っている;「**わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。**」…『ヨハネの福音書』10章25節◇